

「奇跡のような出来事が起こるのではないか…」という手紙をもらった。年末に自作『大好き～奈緒ちゃんとお母さんの50年～』の大学での上映を企画してくれた友人からだ。「奇跡」って何だろう？と一瞬思いながら、我が映画が大ヒットするということかな？とノーテンキに想像する。というのは大学での自主上映の学生諸君の反応がスコブルよかったからだ。彼が、そして私も心動かされた学生達の感想の一部をオスソワケしよう。

(11/29北九州大学・12/22早稲田大学 上映後の感想)
「愛情とはこんなにも素晴らしいものなのだとということに気づかされた。映画の中にある描写の一つひとつが愛情に溢れるシーンで埋め尽くされていた。」

「この50年間の“いのち”の記憶は、私達にいのちの尊さを問いかけてくれて人間の営みを持つ本質的な強さや美しさを感じさせてくれる記憶なのではないかと私は思います。」

「答えを急いで求めてしまうこの世の中に、中庸の、あわいの、答えのない映画に出会える奇跡に感謝します。何が幸せなのか、何が人生なのか、わからないこと自体が人生なのだなと感じることができる映画です。」

「一人ひとりの方の言葉がしみこんでくるような、語りかけられるようなあたたかい映画でした。」

「私がよく観る映画のような、派手な展開からのきれいなハッピーエンドとかではなくて、リアルでさいな日常の一部がゆったりと流れていて、ほっこりしました。“羊水検査がなくてよかった”という部分が特に印象的で、何もかも結果を知って取捨選択をすることがよいこととは限らないと改めて思いました。」

「映画を観て自分の考えが180度変えられたと言ったらウソになります。でも、変わっていきたく強く思うようになりました。」

「19歳でこの映画を観ることができて良かったと思う。」

「この映画を観る前、50年もの人の記録というのは、19年弱しか生きていない人間にどう映るかと思っていたが、こんなにもいろいろなことを考えるとは思わなかった。」

「いろいろなことを考えました。家族のこと、愛のこと、死ぬこと、他にもたくさん考えました。」

「奈緒ちゃんはお母さんや家族の苦しみを理解していて、行動しているように見えました。奈緒ちゃんがいるとき、みんな笑顔で幸せそうでした。」

「全員が世界にたった一人の存在であり、尊い命である。だからこそ、よく生きるために、自分らしくあるために、強くなるのだと思った。強くなった時に、お母さんと奈緒ちゃんの間にあるようなまっすぐな愛を与えたり受けたりできるようになるのかなと思った。」

「ドキュメンタリーは過去のことを見せるだけではなく、今不安になっている人や同じ立場にある人にこういう未来もあるよという風に伝える力も持っているということに初めて気づかされた。」

「日常の中に潜む特別な瞬間」。日々の些細な出来事が、実は人生において最も重要な瞬間であるということを知ることができました。この視点を持つことが、人間関係や日常生活に対する感謝の気持ちを生むのだと思います。」

「この映画を通じて、人は他者を支えることで自身も成長し、喜びや幸せを見出せると気づいた。奈緒ちゃんのお母さんが“奈緒ちゃんに育てられている”と言っていたことからそう考えるようになった。」

「奈緒ちゃんは生かされた」そう奈緒ちゃんのお母さんが言ったとき、“ああ、私も生かされたのかな”と不思議な気持ちになった。いろんな人に助けられて、神様に生かされて、今の自分がある。そう考えると人間の生命力と助け合いの精神は奇跡を起こすのだと感じた。」

どの感想も、実に真っ直ぐに映画を受け止めてくれている。「ドキュメンタリー映画という宝物が手元にあるのですから、あと一步を踏み出せば“奇跡のような出来事が起こる”と、友人の手紙にあった。

「奇跡」は起きるかもしれない。

「奇跡」なんか起きないかもしれない。

でもやってみよう。

やれるだけのことを

やってみなきゃ「たから」の持ちぐされだ…

自主上映の力になってほしい。